

## アジアにおける教会の使命

—私の信仰告白—

船 戸 良 隆

### 生い立ちから入信まで

「アジアについて話して欲しい」とのご依頼を受けまして、卒業生として少しでもお役に立てれば嬉しいと思い引きうけたのですが、具体的に準備を始めて、はたと困りました。当初は、多少学問的にアジアにおける宣教の歴史などを話したらよいかと思ひまして準備をしたのですが、私の学生時代をふり返ってみますと、東京神学大学の学生は、ほとんどアジアに対して関心がありませんでした。わたしたちの時代に宣教師の先生による「世界宣教論」という講義がありましたが、出席率が非常に悪く、また出席しても、ほとんどの学生は寝ていました。大分前のことですが、私が東神大の先生に「もう少しアジアの事を勉強して頂けたらと思うのですが…」と言いましたところ、その先生は「船戸君、東神大は日本で伝道する人を作るのだから」とおっしゃいました。そういうことを考えますと、私がここでアジア伝道論を語るよりは、むしろ私がなぜアジアと関わるようになったかを私の信仰告白として、また、アジアに関わって信仰的に学んだことの一部を語った方がよいのではないかと思ひなおし、今日は、それらについて話させて頂きたいと思ひます。

私の信仰の事を申し上げるためには、生い立ちのところからお話しなければなりません。わたしは1936年、東京の芝で生まれました。祖父母は熱心な日蓮宗、身延山の信徒で、朝晩、お経を上げなければ食事も出来ないと言う家庭でした。キリスト教とはまったく縁も所縁もない家族でした。高校生になりま

して、非常に心を惹かれたのは「論語」でした。その中でも、いまでも覚えている言葉は「蔬食を食い、水を飲み、肘を曲げてこれを枕とす。楽しみ亦、其の中に在り。不義にして富み、且貴きは、我においては浮雲の如し」という一節です。私はこのような論語の言葉に憧れと理想を感じておりました。しかし、「論語」にしたがって生きようとすると、そこには「在るべき姿」と「在る姿」との葛藤が在りました。「論語」を実際の生活の中に活かそうとしても、それについてゆくことの出来ない自分を見出さざるを得なかったのです。そのような中から、私は人間のありのままの姿を描写する自然主義文学に惹かれていきました。醜い人間の姿、そのようなものを追求して行くと、魂は次第に暗く、魂のドン底を経験するというようになってきました。毎日、暗い気持ちで過ごしていた、そんなある日、わたしは浜松町駅のすぐそばにある公園を、正宗白鳥の「自然主義文学盛衰史」という文庫本をもって歩いていました。その時、公園の一角から、私が今まで聞いたことのない何とも綺麗な音楽が流れてきたのです。思わず私はその音のするほうへと惹きつけられて行きました。公園の隅にあった「海員会館」で基督教の集会が開かれており、そこで、讃美歌が歌われていたのです。その讃美歌に惹かれて、私は基督教教会に行くようになったのです。いま考えてみますと、その時に基督教と出会わなかったら、私は偏狭な国粹主義者になっていたかもしれません。というのは、その頃、私は浅草公会堂を本拠としていた「大日本愛国党」の赤尾敏にも熱中していたからです。まさに摂理としか言いようのない神のお導きにより、私は教会に行くようになったのです。

教会に行き始めて、まず驚いた事は、基督教の「祈り」です。私は、祈ると言う事を幼少の頃からしていました。ものごころがついた時から、お線香をあげ、仏壇の前で祈っていました。その時に私が祈った事は、私自身の事や病身の母の事や家族の事でした。ところが、教会へ行き始めて分かったことは、教会の方々はまったく見ず知らずの方々のためにお祈りしているのです。こういう感覚は私にはほとんどありませんでした。考えてみますと、だいたい日本人の祈りの内容は、身内のために祈るという範囲を出ないのではないでし

## アジアにおける教会の使命

ようか。私は教会に来て初めて、見ず知らずの人を「隣人」として祈るという事を知りました。この「隣人の発見」ということは、私にとってたいへん大切な経験でした。「隣人」は、距離に依らない、また、その存在が自分にとって価値があるかないかに依らないことを教えられました。最近、私が「バングラデシュ云々」と言いますと、教会の方から「なぜ、日本にも困っている人がいるのに、わざわざ海外まで行くのですか。」という質問をされることがあります。もし、そのように問うのであれば、私は「日本に福音が伝わることはなかったのではないか。」と答えるほかありません。私どもの会（ACEF・エイセフ）はその前身を「海外宣教を考える会」と言いましたが、ある時、東神大の宣教師の先生をお招きして、日本の教会について忌憚のないご意見を伺おうと言うことになりました。その先生はこうおっしゃったのです。「自分は日本の教会に来て驚いたことがあります。それは、日本の教会の祈りというのは、ほとんど自分達のこと終始しているように思えるのです。アジアのため、アフリカのため、あるいは世界の教会のために祈るという機会が極めて少ないのではないのでしょうか。」と。私たちは、知らず知らずのうちに日本的キリスト教というか、いわゆる身内のためにしか祈らないと言う日本人的思惟構造の中に閉じ込められているのではないのでしょうか。

話しを元に戻しますと、私の行っていた教会は非常に保守的な、いわゆるファンダメンタルな教会でした。驚いたことに新聞も読んではいけないと言うのです。世俗的なことだからと言う理由でした。また、日曜日には絶対働いてはいけないともいわれました。「では、教会にくるために電車に乗りますが、運転手さんはどうなのですか」と聞いたら、それは別だと答えられました。（笑い）いま思い返しますと、この保守的な教会に行ったことは、私の信仰生活にとっては大変よかったと思います。この教会は、ホーリネスの流れでしたから「聖い生活」ということを強調しました。毎週日曜日、夕礼拝の最後のあたりで、宣教師の先生が「目をつむって、神様の前で聖い生活をしている人は手を挙げてください」と言うのです。信仰的に満たされている時には静かに手をあげることが出来ましたが、そのような日ばかりではありませんでした。神の前

に立たされた自分が「聖くない」という現実直面させられた日のほうが多かったように思います。私は、信仰と行為の狭間に立って非常に深刻な体験をさせられました。キリスト教といっても、その宣教師のいう事が、唯一絶対の神の意志としか考えられませんでしたので、逃げ道のない葛藤でした。後に東神大に入学して、ルターについて学びましたが、ルターの信仰体験が本当によく分かりました。「聖くなるということは、おのれの罪人なることをますます深く知ることなのだ」と教えられた時、まさにその言葉は、私にとって福音そのものでした。この経験は、私の生涯の信仰生活にとっても大変貴重なものだと思います。

私は、この教会で「罪の赦し」の体験をしました。当初、「真実なるもの」を求めて教会を訪れた私は、やがて教会の中にも汚いもの、醜い人間の姿を見つけ、次第に絶望的になっていきました。しかし、不思議なことに、これこそ神の導き以外のなにものでもないと思うのですが、ずっと続けて教会には行っていました。誰と話しをすることもなく、ひとりで教会堂の一番うしろに座り、礼拝が終わると黙って帰ってきました。どのくらい続いたでしょうか、私にはずいぶん長く感じられましたが、ある時、私が祈っていると神からの語りかけが心に響いてきました。「君は今まで、あの人が悪い、この人はでたらめだと言っていたが、もっとも罪深いのは、君自身ではないか」という声でした。はっと気づかされた私は、心から自分の罪の赦しを求めて、泣きながら祈りました。教会の一人一人に対して心からのおわびを申し上げたいと思いました。長い祈りの後、パット目をあけて見ますと、私の周りが黄金のように輝いているのです。そして、今まで誰とも話したくなかった自分が、全ての人に親しみが持て、やたらに握手を求めて「すみませんでした」とお詫びを言って回りました。私は、この時、神によって自分がまったく新しく造り変えられ、自分の人生に意味と目標が与えられたという体験をしました。そして、二つの決心をしたのです。一つは、神さまが自分の人生に意味を与えて下さったのだから、自分の生涯は伝道者以外にないということ。他の一つは、生涯を貧しい人のために捧げたいということです。

## アジアにおける教会の使命

私の行っていた教会は、伝道熱心な教会でした。毎週日曜日に、教会のある久ヶ原から蒲田まで行って、駅前で路傍伝道をしました。車にオルガンを載せて運び、讃美歌を歌って証しをします。ここでも私は貴重な体験をしました。証しに立った時、こちらの魂が恵みに満ちているときは、たいしたことを言わなくても、人々は立ち止まって聞いてくれます。しかし、魂の空虚な時には、いくら大声で叫んでも、人々は集まってくださらないのです。ある時、ひとりの酒に酔った土建屋さんが、わたしの証しを聞いて「教会に行ってみよう」と言い出したのです。私は喜び勇んでその人を教会に案内しました。彼は、それ以来教会に来始めて、洗礼を受けクリスチャンになりました。ところが、ある時、彼は大阪に転勤を命じられました。教会の友人は、みんなで彼のために祈り、大阪へと送り出したのです。

長い時間が流れ、私たちも彼のことを忘れかけていました。ある日の夕拝、教会の外でわいわい騒ぐ声です。何事かと思っていると、教会の前で誰かが「船戸を出せ」「船戸を出せ」と叫んでいるとのこと。私が急いで行ってみると、そこにいたのは、あの土建屋さんでした。無理やり教会に引きづりこんで、「どうしたんですか」と聞くと、彼は、一番後ろの席に座り涙を流しながら、こう訴えるのです。「船戸さん、世の中は、あなたたちが考えているほど甘くないよ。自分も一生懸命クリスチャンの生活をしようとがんばったが、とうとうだめだった。」大粒の涙をとめどなく流し、私に訴えるように、そしてまた、赦しを乞うように、おいおい泣きながら話すのです。彼はたまたま、東京に出張に来て蒲田駅を通りかかり、懐かしさのあまり教会を訪ねたいと思ったのでした。しかし、とてもしらふではくる勇気がなかったので、酒を飲んできたといいます。そして、酒くさい息を吐きながら「自分はダメだ。こんな人間はダメだ」と何度も何度も訴えかけてくるのでした。

私にとって、これは信仰上の大きな経験でした。「このような人たちに信仰が伝えられなくては、自分は伝道者になることは出来ない」私はこう思いました。そして、「この聖書一巻でどんな状況にあっても生きて行ける」という確信がなければ、私は伝道者として立つ事は出来ない、と思うに至りました。後

に、私は筑豊炭鉱に行ったり、戦火のベトナムに参りますが、それら全ては「聖書一卷を信じて生きられるか」を身証したかったからにはほかなりません。そこで私は、すぐにでも神学校に入りたいという決心を変え、一年間、日雇い労務者をしてからと、大森職安に通い、短期臨時工としての生活をしました。私がこの当時、いつも考えていたことは、「共に生きる」とはどういうことなのかということでした。そして、東京神学大学に入学したのです。

### 筑豊炭田での経験

東神大3年の時、「筑豊の子どもを守る会」というキリスト者の学生運動を、全国のキリスト教系大学の学生で結成しました。当時、エネルギー革命で筑豊の炭鉱は閉山へと向っていました。私たち神学生も六十年安保の影響を受け、「キリスト者として社会問題にどのように関わって行くべきか」につき議論し、実践を模索していました。六十年安保の後に起こった「帰郷運動」などの影響も受け、また、ボンヘッファーなどを読み、奉仕とは何かなどを真剣に議論しました。そのような中で、隅谷三喜男先生を顧問として「守る会」が結成されていきました。「日本社会の矛盾の集積地、すなわち、日本資本主義の害悪が露呈され、日本社会における封建制の残滓の集約点である「筑豊炭鉱」という現場の状況にあって、キリスト者である私たちは、どのように生きなければならぬか」がわたしたちの課題であると考えたのです。東神大の学生も夏休みを利用して筑豊に入り、奉仕活動をしました。そういった中で私は意を決し、一年間休学して筑豊炭鉱に行くことにしました。これを聞いたフランクリン教授（キリスト教社会倫理）が生活費を全額、東神大から出してくださるよう取り計らってくださり、私は単身、福岡県田川郡金田町福吉炭鉱という、東神大が夏休みにキャラバンをしていたところに入っていました。

私は炭住に住み、最初に、子どもたちの世話や青年会、婦人会の結成などに当たりました。夏休みには、東京や関西から学生が来て、一緒に楽しいプログラムを作って活動し、地元の方々も、とても喜んでくださいました。やがて夏が終わり、学生たちも帰っていきました。すると急に淋しくなり、ボタ山に秋

## アジアにおける教会の使命

風が吹く頃には、すこしの疲れも出てきました。当初は、なにをやっても全てうまくいったのに、この頃になると全てのことがうまくいなくなって来ました。意気消沈して迷っていたところに、東京からたくさんの古着などが送られてきました。そうだ、これでバザーを開き、婦人会の活動資金を作ろう。婦人会の人たちに相談すると大賛成でした。みんなで力を合わせて開いたバザーは大成功、久しぶりに福吉は活況を呈しました。私もその成功を大喜びして宿舍の炭住に戻り、ダイナマイトの箱をつぶして敷いた床に大の字になって横になりました。すると、私の家の前を二人の婦人が、いかにも私に聞こえよがしに、こう言ってとおりに過ぎて行ったのです。「あんなバザーをやったって、貧乏人にはなんの役にも立ちはしない。タダで送って来たものに値段をつけるなんて、あたしたち貧乏人にゃ買えやしない」。ありとあらゆる罵詈雑言を並びたてるのです。私は、はらわたが煮え返る思いでした。一体何の為にバザーを開いたのか、全てはこの「福吉」の婦人方のためではないか。にもかかわらず文句を言うとは何事か。私はすぐさま荷物をまとめて、東京に帰ろうと思いました。こんな所に居てやるものか。怒り心頭に発し、いても立ってもいられない思いでした。しばらくは、そのような思いが頭の中をぐるぐると回っていました。どのくらい経ったのでしょうか、神学生なのだから、ともかく祈ろうと思い、聖書を持ってボタ山に登りました。しかし、祈ろうにも祈りの言葉が出てきません。やがて、少しずつ聖書を読みはじめました。私が信仰を確かなものとした大きな助けになった書物は、内村鑑三の『ロマ書の研究』でしたので、「ローマ人への手紙」を読み進んで行きました。そして5章6節に来た時です。「実にキリストは、私たちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれませんが。しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださった事により、神は私たちに対する愛を示されました。」この聖句を読んだ時、私は打ちのめされました。私の身体に戦慄が走りました。自分は何の為にこの筑豊に来ているのか。人々に「ありがとうございます。本当に助かります」というお礼

の言葉を期待していたのではないか。だから、たった一言、婦人から悪口を言われただけで、烈火のごとく怒ったのではないか。「偽善者たちが人からほめられようと会堂や街角でするように、自分の前でラッパを吹き鳴らそう」としていたのは、この私ではないか。なんという情け無いことか。涙が頬をつたってきました。そして、私のような情け無い罪人のためにこそ、主イエスは死んでくださったのだと言うことを知らされた時、とめどなく涙がこぼれ、ざんげと感謝の祈りが自然と口をついで出てきました。

そもそも、何か善いことが私にできると考えていた事、そこに罪があったのでした。だから何かをしなければならぬという一種の義務観念にとらわれていました。何かをしなくてはならない、何かをしなければならぬ、とあせっていました。そして、何かが出来ればお礼を求め、お礼がなければ人でなしと怒ったのです。もともと、奉仕、よい事など出来るはずのない者、神からゼロを宣言されているものが、何かをしてあげよう、何かが出来ると考えていたところに傲慢があったのです。なにも出来なくてもともと、ゼロなのです。ですから、もし少しでも出来れば、それはお恵みによって出来たことで、全ては感謝。こう考えると肩の荷がスッと下りて行きました。

私が筑豊に行くに行った時、出席していた教会の牧師、北森先生がこういう事を話してくれた事を思い出しました。「君はこれから筑豊に行くと言うが、そこにいる子ども達は必ずしも君が頭で考えているような愛らしい子どもではないかもしれないよ。汚い、反抗的な子どもかもしれない。君はその事がわかっているかなあ。」いかにも北森先生らしく鋭いご指摘だと思いました。すなわち、私たちは愛というものを抽象的に考えている時は、美しいもの、何か出来そうなことと考えていますが、現実はそのような甘いものではないと言う事を先生は言いたかったのだと思います。愛といわれているものの影に、いかにその虚偽が隠されているか、愛の行為と傲慢、またその反面の虚無、ニヒリズム、これは、アジアその他で、一生懸命働こうと努力している人が、必ずぶつかる大きな問題です。

私はかつて JOCS という団体で働きましたが、派遣された医師、保健婦さん

## アジアにおける教会の使命

が一生懸命であればあるほど二つのニヒリズムに直面する姿に出会いました。ひとつは、やってもやっても成果が見えてこないという時にぶつかります。こんな事をしていても無駄ではないか。はたして自分のしていることに意味があるのだろうか。こう考えさせられる裏には、歴史的、経済的、政治的、様々な理由があると思いますが、そのような理由を考える余裕はなく、まったく絶望的になります。その上、お決まりの不正、汚職とくれば、逃げ出したくもなるのです。

もうひとつは、共に生きようと努力する時に会います。現地を理解し、現地の人々と共に、と考へれば考へるほど、それが出来ない自己が浮かび上がってきます。こうした絶望感とどう戦って行くか、どう克服して行くか、これは単なるヒューマニズムでは不可能だと思います。単に、その地の人たちがかわいそうだからと言うようなセンチメンタルな気持ちでは出来ないのです。そこには、徹底した自己否定の精神、神によって出来ない事が当たり前、あなたはゼロないしマイナスだと烙印を押されているものとしての自己認識がなければなりません。ですから、もし私たちが奉仕（ディアコニア）と言う事をいうことができるとするならば、それは、「われも罪人、彼も罪人、罪人同士の赦された連帯感」でしかありえないのではないかと思うのです。赦された者がその感謝において、その自由の中で神に応答する事、これしかないのではないかと思ひます。

## ベトナムでの体験

私は1967年に、NCCと日本キリスト教団から派遣されて、当時、EACCがサイゴンに作った難民、孤児の救援組織「アジアキリスト教奉仕団」(ACS)に参りました。そして、約6ヶ月の語学準備の後、チョロン地区に靴磨き少年たちのための施設を作りました。子どもたちと寝食を共にしながら、ある子どもは、丁稚奉公の職業訓練に、ある子どもは学校に行くように勧めたりしましたが、ほとんどの子どもは相変わらず米兵の靴磨きに明け暮れしていました。そこで私も、時折「平和のために祈れ」とベトナム語で書いたノンラーという

帽子をかぶり、サイゴンの町に子どもたちと靴磨きに行ったりしました。

ベトナムで学んだことは数多くありますが、その中から二つほど取上げてみます。ひとつは、価値の多様性に気づかされたということです。東南アジアの方々と接してみると、特にベトナム人と比べて、いかにも日本人は単純、わりきり型です。マスコミは、単純に、解放戦線善玉説を取っていました。しかし、現実はそのような単純なものではないことを、いくつもの例で知らされました。あれかこれかと言う単純思考は、場合によっては「ゆきあたりばったり」ではなくて「ゆきあたってばったり」となりかねません。すくなくとも日本人は、日本人的ものの考え方を客観視し、アジアにはいろいろな価値観を持った人たちがいるのだと言うことを、身をもって知る必要があります。そうしなければ、次世紀を生きて行くことが出来ないでしょう。

次に、アメリカ人キリスト者のすさまじい生き方に深く考えさせられました。アメリカは戦争において多くの人を殺し、非難の的になっていましたが、それと同時に、同じアメリカ人で、戦争をやめさせるために、まさに決死の覚悟で働いているキリスト者に出会いました。もともと、私がベトナムに行く決心をしたのは、日本におけるチョーチンデモへの疑問からでした。ベトナム戦争反対のデモをチョーチンをさげてるわけですが、デモが終わると喫茶店に入り、美味しいコーヒーをすすりながら、ベトナムについて論じるというありさまでした。これでいいのか、私には疑問でした。一方においては人が死に、他方、その戦争で大いに儲け、安楽な生活をしながらベトナム戦争を論じる、こんなことでいいのか、自分自身が問われていました。十字架上のイエスに向かって「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言った強盗に対し、イエスは「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われました。しかしその時、イエスは、十字架の下の安全な所におられたのではなく、ご自身も十字架についておられたのです。このことが私の心の片隅から、いつも離れませんでした。もし、ベトナム戦争を論じるのであるならば、少しでも苦しむ人々の近くにいなければならないのではないか、これが私のベトナム行きの動機でした。しかし、ベトナム

## アジアにおける教会の使命

にきてみると、そんな生易しいものではないのです。私の友人であったアメリカ人クエーカーのドン・ルース氏は、文字どおり生命を賭けて反戦運動に没頭していました。彼の最大の成果は、コンソン島における政治犯収容所「虎の檻」を世界に知らせ、アメリカの世論をベトナム戦争反対へと導いたことでしょう。私は、パウロがガラテヤ書 6:17で「イエスの焼印を身に帯びて」と言った姿、現代の殉教者の姿を彼において見ました。

## 三つの課題

まだ話したいことはたくさんありますが、時間がありませんので、最後に、皆さんに考えて頂きたい三つの課題を提案し、この講演を終わらせていただきたいと思います。

第一に、初めにも申し上げましたが、「日本で伝道するのだから、日本のことだけを知っていればよい。アジアのこと、世界のことを知る必要がないのか」という問題です。この考えを推し進めれば、結局は、自分の教会のことだけしか考えない牧師、実際、牧会に立てば様々な問題があり、なかなかそんな余裕がないということは分かりますが、非常に狭い各個教会主義というか、公同の教会ということすら分からなくなってくるのではないかという問題です。こういうことでは、聖書の示す「隣人」という点でも問題があると思いますが、同時に、自分自身がなんであるかも分からなくなってくるのではないかと思います。自分の顔は、鏡を見なくては分からないように、日本の教会がどのようなものであるかは、アジアの教会、世界の教会を鏡としなくてはわかりません。自国の文化は、異文化との接触がなければ客観的に知ることが出来ないのと同じように、私たちは、アジアに出て行って、アジアを体験する事によって、日本の国が、そして、日本の教会が非常に特殊だと言うことが出来るのです。こういう意味からも、私はアジアから学ぶべきではないかと思います。

第二に、アジアの社会が背負っている問題に対し、キリスト教倫理をもって、どのように切りこんでゆくのかという課題です。たとえば、ある人が、東南アジアから日本に研修に来たとします。その人は、日本である技術を習得して祖

国に帰ります。しかし、その習得された技術は、かならずしも役に立たないと言う事実が起こります。なぜかと言いますと、日本で研修を受けたということで、自国社会における社会的地位が一ランク上がり、その技術を生かす位置にいらなくなるからです。偉くなった人は、仕事をしないというのが、アジアにおけるひとつのパターンです。ですから技術の伝達という事が非常に難しいのです。「僕として仕える」というキリスト教倫理が、アジアの発展にとって非常に重要なこととして考えられなければならないと思います。私はある時、バングラデシュの片田舎で、キリスト教系 NGO 事務所に掲げられていたカレンダーに、こんな聖句が書かれていたのを見て大変感銘を受けました。それは「仕えられるためではなく、仕えるために」という御言葉です。

最後に、二十一世紀の世界、日本を形成する原理としてのキリスト教ということを考えてみたいと思います。二十世紀を形成してきた原理は、「大きい」とか「強い」ということでした。それをめざして歩んできました。しかし、その結果はどうなったのでしょうか。「富めるもの」と「貧しいもの」との格差が、有史以来もっとも大きくなってしまいました。私はテロを賞賛するつもりはありませんが、あの 9 月 11 日の事件は、二十世紀の矛盾の集積であると思います。二十一世紀は、もはやこれまでの原理では立ち行かなくなっているのです。すでに国家とか、政府の存在だけでは、世界に起こってくる問題を処理し切れなくなっています。そこに登場してきたのが「NGO」とか「NPO」という市民組織であり、二十一世紀は NGO の世紀であるといわれる所以です。しかし、日本においては、その NGO の力が極めて弱いのです。国際協力をしている NGO に限って言えば、その運動を支えている会員数は僅か 35 万人で、人口比にして 0.3 % しかありません。欧米に比べれば、圧倒的に小さいのです。これは何が原因かと言いますと、いろいろあると思いますが、その最も重要なものとして、NGO を形成してゆく社会的な精神原理、すなわち NGO を支えるエートスの欠如であると思います。NGO を形成し、支えてゆくエートスとしては「パブリック・センス」(公共の精神)が重要なのです。しかし、日本で「パブリック」すなわち「公」と言いますと、「おおやけ」即、朝廷、政府を意味し

## アジアにおける教会の使命

ます。「パブリック」というのは、元来「ガバメント」(政府)でもなく「プライベート」(個人)でもない「公共」,「公民としての権利,義務」を表わしますが、戦中の「滅私奉公」を経験した日本は、戦後「公」という感覚を極端に嫌い、もっぱら「私」の感覚が闊歩している状況です。こういった中で「パブリック・センス」を養うのは極めて困難です。二十一世紀の日本が歩むべき道として、もはや「経済大国」としてあり続けることは不可能です。それに代わるものとして、「地球市民の形成」を目指すこと、飢餓のない平和な世界、全ての民族が平等の権利を有し、何ものによっても強制されず、自由な世界を「地球市民」として形成すること、この目標こそ日本人が世界に貢献する道ではないでしょうか。その地球市民形成原理としての「パブリック・センス」、その「パブリック・センス」を形成してゆくものとしてのキリスト教倫理、それを生み出すものとしてのキリスト教会が問われています。今、わたしたちは、このような課題の前に立たされているのではないのでしょうか。

皆さんには、しっかりと聖書に基づいた説教を通じて、二十一世紀を創造してゆく人間を形成していただきたいと願う次第です。ご清聴ありがとうございました。

(ふなと よしたか・アジアキリスト教教育基金事務局長)